The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十巻第一号　平成二十三年十二月

『念仏三昧宝王論』諸本の系統

加藤弘孝

はじめに

飛錫（生没年不詳）の『念仏三昧宝王論』（通称『宝王論』）三巻は、思想家としての円熟期であった大暦九年（七七四）以降に撰述されたものだと考えられる（『浄土教典籍目録』二二七～八頁）。その後の流伝及び系譜に関しては未知の部分が多く、テキスト校訂に際しての底本、対校本に関する問題も未解決のままである。そこで現存する諸本を検討した上で、それらの系統を明確にし、テキスト校訂作業において前提となる書誌情報を提供したい。

一　『念仏三昧宝王論』諸本

現存する『宝王論』の写本、刊本には次のものが挙げられる。①「禅林図書館蔵本」（鎌倉期写本、損傷甚だしく閲覧不可能）、②「嘉興蔵版」（刊本）、③「慶安元年版」（刊本）、④「元禄十三年版」（刊本）、⑤「享保六年版」（刊本）、⑥「安永三年版」（刊本）、⑦「乾隆四十九年版」（刊本）、⑧「光緒二十年版」（刊本）、⑨「中華民国十九年版」（刊本）。

このうち②⑦⑧⑨は中国版行のものであり、①③④⑤⑥が日本において流伝してきたものである。①禅林寺本の識語のみが十四世紀まで遡り得るが（『禅林寺所蔵図書館収蔵典籍目録』第一、七頁）、大半のテキストは清代初期、江戸初期以降のものである。そこで刊記などの書誌情報を補足し得る、撰述以後から十四世紀頃までの両地における流伝状況を概観していく。

二　流伝の考察

『宝王論』本文が他書に初めて現れるのは、同時代の慧琳（七三七―八二〇）の『一切経音義』百巻においてである。計三一箇所の反切注釈が存在し、この時点で既に三巻本だったことが確認できる。次に引用されるのは呉越の延寿（九〇四―七五）の『万善同帰集』三巻である。『宝王論』の「現行版」

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

（『大正蔵』所収本）と比べて、文字の異同や文の欠落が見られることから、刊本以前の古形を示している可能性がある。特に「現行版」にはある「一言以蔽、（其在茲焉）」という『論語』巻一の文言を受けた一文が見えない点が興味深い。

北宋末期の士大夫である黄伯思（一〇七九―一一一八）の評論、跋文が多く収められた『東観余論』巻下には、「跋宝王論後」が収録されており、流通の事跡を確認できる。黄伯思は儒教や史の素養がある典型的な科挙官僚である。この跋文には、政和七年（一一一七）十一月三日、『宝王論』を閲覧し、その内容と『論語』、『漢書』の文言が一致したので跋文を記したとある。本跋文は③慶安版にも附されており、このことを根拠として任継愈編集の『佛教大辞典』では、『宝王論』の「宋刻本」が存在したことを想定している。執筆の動機を考察する際に注意すべきなのは、跋文執筆と同年の政和七年（一一一七）四月、道教を偏重する徽宗（一〇八二―一一三五）の命により、六千巻の仏典（大蔵経）の中から儒教及び道教を誹謗しているものが抜き出されて焚書の憂き目を見ているという事跡である（『仏祖歴代通載』巻十九）。恐らく黄伯思の跋文は、『宝王論』版行の際に実施される検閲を意識して執筆されたものだったと考えられる。『宝王論』の節略文が部分的に収録される宗曉（一一五一―一二一四）の『楽邦文類』五巻及び『楽邦遺稿』二巻の内、後者には「念仏三昧宝王論跋」として黄伯思の跋文が載録されているのが、跋文附載の刊本が南宋期に流伝していた事実を裏付けている。南宋期には、他にも法雲（一〇八七―一一五八）の『翻訳名義集』七巻、王日休（―一一七三）の『竜舒浄土文』十巻、戒度（生没年不詳）の『観無量寿経義疏正観記』三巻など江南地方で成立した著作に引用が確認できる。南宋期以降の流伝に関しては、明代末期に『宝王論』と妙叶（生没年不詳）撰述の『宝王三昧念仏直指』二巻との合刻である「合刻本」が古呉（蘇州）において発見されたことが、于海波によって指摘されているもの（『清代浄土宗著述研究』一七四～五頁）、『宝王論』直接の引用例は確認できない。なお「合刻本」は②嘉興蔵版の底本である。

一方、『楽邦文類』及び『楽邦遺稿』からの引用ではないことが明白なものは、日本において見出せるようになる。禅林寺の静遍（一一六六―一二二四）による『秘宗文義要』五巻や親鸞（一一七三―一二六二）の『教行信証』六巻、道光（一二四三―一三三〇）の『往生拾因私記』三巻、託何（一二八五―一三五四）の『器朴論』三巻、杲宝（一三〇六―六二）の『秘蔵要文集』十巻、良栄（一三四二―一四二八）の『選択決疑鈔見聞』十巻、聖聡（一三六六―一四四〇）の『往生論註記見聞』十巻などである。なお日本における『宝王論』受容に関しては、唐中期仏教思想研究会の吉田淳雄が注目すべき説を提唱

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

している。それは親鸞の『教行信証』、良忠（一一九九―一二八七）の『選択伝弘決疑鈔』五巻などの著作、『四十八巻伝』に見られる『宝王論』受容の状況から、入宋した俊芿（一一六六―一二二七）によって、建暦元年（一二一一）以降、『宝王論』の「宋刻本」が齎され、そのことを契機として浄土教家に流通したというものである（『念仏三昧宝王論の研究』三八四頁）。次章以降において、系統の問題と併せて考察する。

三　系統の考察

吉田淳雄は①禅林寺本と②嘉興蔵版以外のテキストに言及して、③慶安版と④元禄版に若干の文字の異同が見られること、⑤享保版が先行する二種の校合本であること、⑥安永版と⑧光緒版が節略本であること、⑦乾隆版と⑨中華民国版が基本的にはほぼ「現行版」と同じ系統のテキストであることなどを指摘している（『前掲書』三七〇～四頁）。以下にこの説を念頭においた上で私見を述べていく。

諸本の文字の異同に注目した場合、ある事実に気付かされる。それは先達のいう③と④間の異同が若干ではなく、またそれが大陸で刊行された②と③との差異（七七箇所の相違）に、かなりの割合で重複するということである。このことは④の底本が②であることを示している。字体や書体などに、共通する点が見出せることからも、大方、間違いないところであると考えられる。更に異同の観点から諸本に注目した場合、⑨も②を受けていることがわかる。⑦は②の重刊であるし、⑥と⑧の節略本も②を参照している。つまり若干の差異とは言えない異同から推察すると、両系統を校合した⑤を除いて、「合刻本」を底本とする②の影響下にある④⑥⑦⑧⑨と③とに大別できるということになる。つまり③のみが異質性を持ち、系統が異なるということになるのである。

吉田は文字の異同には言及せず、⑦の底本（②）と③の関係について、黄伯思の手による跋文、日本における流伝状況を根拠に、「慶安版の底本について想像を逞しくすれば、恐らくは鎌倉時代の俊芿将来本かその系統にある伝本が、何処かの寺院の経蔵から借り出されたものと思われる」（『前掲書』三八六頁）と両者に関連が無いことを述べて、系統の問題解決への糸口を与えている。確かに跋文に注目した場合、『楽邦遺稿』に、節略文ではあるものの同様の跋文が載っているということは、「俊芿将来本」にも同様の跋文があった蓋然性は高くなる。②にこの跋文が無いのは、「合刻本」として刊行された際に、削除されたのを反映しているとも考えられる。先行研究で指摘されるように、③が「俊芿将来本」の系統に属する可能性は十分にあり得る。ただ俊芿と断定し得る材料も無いので、ここでは将来者に俊芿以降の入宋僧などを含める意味で「将来本」と称する。また両系統の差異がほ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ぼ文字の異同のみに止まっていることも、両者の底本が江南地方で流伝していた刊本を淵源にしていることを踏まえるならば得心が行く。「将来本」は十三、四世紀頃、「合刻本」は恐らく十五世紀頃の流伝であり、時期も比較的に近接しているのである。なお吉田の想定する「何処かの寺院の経蔵」に収められていた③の底本について言及すると、京都禅林寺の①が、鎌倉期という時期や京師という地理的環境（③は京都の書肆による版行）など、これに相応しい条件を備えているようにも思われるが、それは精査してみなければわからない。写本修復技術の更なる発達を願うばかりである。また③には中古音での音通もしない、明らかな誤字（「惑」→「感」、「犬」→「太」、「忽」→「怨」、「日」→「白」、「仗」→「伏」、「令」→「今」、「述」→「迷」など）があり、写本を底本としていた可能性自体はあり得る。付け加えるならば、③底本の脱字かどうかは判断できないが、③は②と比べて総字数が一〇字少ないということも指摘しておく。

おわりに

以上、『宝王論』の系統について考察した結果、蘇州に流伝していた「合刻本」（十五世紀頃）を底本とする②嘉興蔵版が③慶安版以外の全ての刊本に影響していることを明らかにした。また孤立する③に関しては、南宋の勢力圏で流通していた「宋刻本」にまで遡り得る「将来本」の系統に属する可能性があるという仮説の信憑性を補強することができた。恐らくは①禅林寺本を精査することによって最終的な確証が得られ、それに伴って「宋刻本」に近接する「将来本」の全容も自ずと明らかとなるであろう。したがってそれまでの校合作業においては、誤字脱字も無く大陸における来歴が明確な上に、最古年代の跋文を持つ「合刻本」系統の②を底本として用い、③は、あくまで「将来本」系統の可能性を有するテキストと位置付けた上で対校本として用いるのが、現段階での学術上の安全かつ慎重なテキストの運用姿勢だといえる。

諸本の系統が定まったところで、一つの仮説の提唱をおこないたい。それは宋代における『宝王論』流通は、黄伯思周辺において宋学の視点からの本文考証が為された結果だというものである。紙面の都合上、詳細は別稿（『佛教大学仏教学会紀要』第十七号、二〇一二年三月発行予定）に譲る。

〈キーワード〉『念仏三昧宝王論』、飛錫、黄伯思、宋学

（佛教大学大学院）

NII-Electronic Library Service